

創価学会をめぐる社会的諸動向と

「言論の自由」の問題点

梅 原 正 紀

(まえがき)

昨年十月「創価学会の教義と思想」に関するシンポジウムを行ったが、それと並行して「創価学会と公明党」に関して報道されていない事件や社会的諸関係などのデータをもちより、分析検討を加えるシンポジウムを行った。研究所外部から招いたのは、「公明党の素顔」の著者である内藤国夫氏、中央公論編集記者で社会問題評論家でもある柳田邦夫氏、宗教評論家の梅原正紀氏らである。当時は内藤国夫氏の著書めぐって広告代理店や出版取次店に創価学会の厳しい圧力が加わっていた。また刊行されるまでの経緯は、藤原弘達氏の場合以上に複雑で、版元さえも転々としたというような事情があった。その後選挙戦からんだ藤原弘達氏の著書をめぐる「言論の自由」問題が花々しく論じられているが、自民・公明・共産の当事者はもちろんのことその周辺にある、言論出版にかかわる問題は単層的な理解ではとうてい解けようのない複雑な状況下にあるといえよう。その錯走した事情を解く手がかりとして、シンポジウム後の諸事情を加えて梅原正紀氏にレポートをお願いしたわけである。

(調査部)

1

共主義者である」と明言する藤原弘達氏と日本共産党が共闘して、創価学会と公明党の言論抑圧行動に強く抗議し、その波紋はますます広がりがりつつある。赤旗だけでなく、新政治評論家として保守派に属し、自ら、はっきりと「反

開社・出版社系の週刊誌、月刊誌などでも、この問題をと
りあげ、創価学会⇨公明党の言論抑圧行動に批判が集中し
ている。

創価学会⇨公明党がこれまで行なってきた批判書への干
渉・妨害工作については、弁解の余地はないが、この間の
一連の動きをみていて、納得できぬことがあまりにも多す
ぎる。まず、事の発端となった藤原弘達氏の『創価学会を
斬る』だが、その出版過程で大宅壮一氏も指摘していたよ
うに、明らかに仲介工作が行なわれるとわかっているにも
かわらず、自民党の田中幹事長の呼び出しに応じて待合
いに出むいていった態度である。

結果は破談に終わったが、そのさい藤原氏が出した条件の
一つである「初版十万部は出す。ただし出した本をどのよ
うな形でお買い取りになろうとそれは自由である」だが、
もし、創価学会⇨公明党が十万部を買いきってしまったら
『創価学会を斬る』は一般読者の手に入らない結果を招く
ことになっただろう。

以上の二点からいっても、藤原氏は、創価学会⇨公明党
の批判者として、適格性を欠くといえよう。いかなる出版
妨害工作を受けようとも出版するために努力し続けた『公
明党の素顔』の執筆者内藤国夫氏に比べて、不純な印象を

受ける。さらにその著書の内容に至っては、データ不足が
随所に目立ち、藤原氏独特のペランメエ口調的レトリック
で、読者をひきずっている部分が多すぎる。

このような粗雑な批判書に対して、異常なまでのアレル
ギーを起こす、創価学会⇨公明党の態度は衆院選を前にし
て出版されたとはいえ、論外といえよう。『創価学会を斬
る』がベストセラーになったのは、その内容の良否よりも
この本の出版過程をめぐって生じた様々な現象が、嘔吐
感を催すまでドラマチックであったからである。つまり、
『創価学会を斬る』は内容的には「斬る」ことができなか
ったが、この本の出版過程をめぐって暗躍したり、妨害行
作を企てた諸関係者の行動が、結果として、創価学会を斬
ることにさせてしまったといえよう。

次に問題にすべきは有力マスコミの報道態度である。つ
ねづね創価学会批判をタブーにしておき、批判書の広告を
拒否しておきながら、世論が盛りあがってくるや、これま
での自主規制についてはなんら自己批判せず、社説等々で
創価学会⇨公明党を批判するといった△及び腰的良識▽ぶ
りは、有力マスコミの本質を、自ら暴露したものと見えよ
う。さらに取次店、広告代理店の△事なかれの自主規制▽
ぶりも指摘されなければならない。

また、創価学会Ⅱ公明党への批判書が出るたびに、その消火作業は奔走する自民党有力者が少しも責任をとろうとしない態度は問題にすべきである。憲法を否定するような行為をした政治家が幹事長に居すわれる自民党とは、いったいどのような政党なのだろうか。組織成員の一人がたまたまハプニングに行動しただけであるから、責任はないとも佐藤総理は思っているのだろうか。

事実無根で押し通そうとした公明党の竹入委員長が自己批判を国民の前で率直に行ない、政治的責任をとらねばならぬのは当然のことだが、公明党の創立者である池田大作会長も責任をとって辞任すべきである。同様なことは田中幹事長、佐藤総理にもいえるのである。国民に対して責任をとるといふ考え方にたてば当然のことである。

藤原弘達氏の家を訪れ、工作をした公明党の藤原行正副議長は、責任上、進退伺いを出したと伝えられるが、藤原行正氏の処断だけで、ことをすまそうとするなら、国民の不信任をますますエスカレートさせるだけである。

日ソ不可侵条約にも似た藤原（弘達）・宮本（顕治）全共闘が提起し、マスコミも従来タブーを破って創価学会Ⅱ公明党の言論抑圧批判がまき起こっているのに、新宗連系有力教団の機関誌紙には、きれいさっぱりと批判記事や

解説記事すら掲載されていない。現在、苦境にたっている創価学会Ⅱ公明党に対し、追いつちをかけるような記事を掲載するのは、宗教者のとるべき態度ではないと八赤十字精神✓を、いまになって発露しているのは了解に苦しむ。

真相はそうした点にあるのではないはずだ。この事實は保守政党側の宗教利用を何よりも雄弁に物語っている。既成・新興を問わず、各宗教教団は、創価学会の激烈な折伏攻勢の被害を存分に受けている。新興教団についていうならば、そのためもあって、昭和四十一年初期以前の機関誌紙には、創価学会批判の記事が掲載され続けてきた。ところが四十一年以降、創価学会への批判記事がいつせいに紙面から消え去っているのである。

創価学会が公明党を結成して、本格的な政治進出を図って以来、非会員の票を集めるためもあって、反社会的な折伏を中止し、ソフトムードの布教法に転じ、他教団との摩擦が著しく減少したことは事実である。またカトリックの打ちだした、エキユメニカル・ムーブメント（教会一致運動）の日本版ともいうべき宗教協力路線が立正佼成会の庭野日敬会長によって提唱され、新宗連傘下教団の統一スローガン化されたことも、創価学会批判の記事が消滅した有力原因の一つといえる。

しかし、原因はそれだけでない。新宗連の機関紙を発行している新宗教新聞社は昭和四十一年四月に、それまで同紙に掲載してきた創価学会員が犯した犯罪事件についての記事をまとめて、『創価学会犯罪白書』を発行したことがある。参考までに同書の序文を引用してみよう。

この白書は、最近の創価学会関係の犯罪事件のうち、確実にウラのとれたものだけを「新宗教新聞」紙上に発表し、それを読者の皆さまのご要望により、小冊子にまとめたものです。

最近あまりにも創価学会信者関係の犯罪事件が多く、しかも、一般新聞には「某新興宗教が……」といったアイマイな形でしか発表されないのは、社会部記者のほとんどが創価学会の教義大系や思想行動に無知なところから、犯罪の誘因となつたとみられる宗教面には、いっこう触れていないからです。

もちろん、たまたま殺人事件の犯人が創価学会の会員であった、という場合でも、宗教的な立場からみれば、人を救い、世を救うべき宗教の信仰者としてあるまじき行為として非難されるべきですが、そうなるとあまり事件が多くて報道しきれないという結果になります。

その意味から、本書では、事件の背後に // 折伏 // 誹法払い // 「仏法は勝負だ」 // 社会の一切の悪の根源は邪義邪宗にある」といった、創価学会の教義、思想、日常の指導などと密接な関係があると思われるような事件だけを選んで発表することにしたのです。

なるべく多くの人たちに創価学会の知られざる実態を知っていただきたいと思えます。

昭和四十一年三月二十日

新宗教新聞社

ついでながら同書の目次を紹介しておこう。

// 吉展ちゃん誘かい殺人事件 // の犯人 // 小原保の狂信ぶり。

仏罰だ!! と入会拒んだ義父を撲殺して平然 // 宗教上認められると信じ。

たまりかねた老父が狂信の息子を殺す // 誹法払い // の乱暴が生んだ悲劇。

母親を夫婦で惨殺、全身二七カ所もの骨折 // 無慈悲にも念珠で殴る。

貯金おろし // ご供養 // へ // 勤行中殺されたアパート経営

の女幹部。

狂信の母をいさめて「少年、海に投身自殺。

堪えかねた夫が絶望、放火焼身無理心中」折伏で家を忘れた妻への怒り。

会員のリンチに脅え、学会をうらんだ遺書「若夫婦、熱海沖で心中？」

女幹部が千七百万円余の詐欺・窃盗「馬鹿をみた信者は三十八人。

学会員から千六百万円まきあげる」「実力がものをいう学会」を信条の詐欺漢。

「指導がきびしすぎる」とムカッ腹「班長と口論して傷害致死。

バイク相乗りの女会員を、ふり落として死なせた会員「運命だ」と届けぬ非常識。

問責決議案つきつけられる「公明党市議・学会幹部が引き逃げ。

特別付録 小原に死刑の判決（公判廷傍聴記）

このような暴露的な内容を持つ『創価学会白書』は、教義批判書よりも、一般大衆に対して大きな影響力を発揮する。ところが、印刷・製本が終って、配布段階に入ったさ

い、「待った」がかかったのである。植村左内氏の説明では、藤原弘達氏の『創価学会を斬る』のさい、田中幹事長が果たそうとした役割を、日大の古田会頭と賀屋興宣氏が買って出たというのである。

『創価学会犯罪白書』は、信濃印刷株式会社から日大に運ばれ、処分されたという。ついでながら、この時、運び手として動員された日大生の一人が、本の内容に興味を持って、こっそり一冊だけ、かくし持っていたところ、嚴重な身体検査を受け、取りあげられてしまったという。この日大生は学校卒業後、公明党と対立関係が続ける民社党の代議士秘書をつとめている。

仲裁にたったといえは聞こえはいいが、結局は出版妨害行為である。それでは、岡氏たちの意図は何であったのだろうか。岡氏ともに創価学会員ではない。となれば、自民党のために公明党工作の一環として動いたと推理されるのである。また古田重二良氏は昭和四十年四月に設立され、△宗教協力・国民皆信仰△をスローガンに掲げる宗教センターの理事長時代に、創価学会の加盟勧誘を積極的にするめたという経歴がある。このときは創価学会も加盟の意志を示したが、設立当初から宗教センターに加盟していた教団グループから反対意見が出て結局は実現せずに終わった。

このように古田重二良氏は、創価学会と他教団との対立を解消するために、動いてきたが、『創価学会犯罪白書』だけでなく、昭和四十二年十月に発行された植村左内編著の『これが創価学会だ』（しなの出版）の出版干渉にも立ち会い、結局、同書は幻の批判書として日の目を見ずに終わったのである。なお、このさいにも賀屋氏が動いたと噂されたのである。

『創価学会犯罪白書』と『これが創価学会だ』の配布中止を代償として、創価学会側は、機関誌紙で他教団を邪教呼ばわりする攻撃記事を掲載しないという申し合わせが関係者の間で行なわれたという。このためもあって、新宗教教団側でも、創価学会に公明党を批判する記事を機関誌紙に掲載しなくなつたのである。いづれにしても、宗教者あるいは市民としての論理が貫徹されておらず、政治的次元で、馴れ合いとでもいふべき形で処理されてしまつたのである。

新宗連傘下教団の機関誌紙に、このたびの創価学会に公明党が行なつた言論抑圧行動についての批判記事が現れない事情は、これまで述べた通りである。保守政党の公明党抱きかかえ工作が、批判記事を書くという当然なされねばならぬ行為より優先するという構造は、日本の宗教界に

とつて、大きなマイナスとして作用している。批判記事はおろか、解説記事すら書かぬ教団の言論の自由に対する態度は、創価学会に公明党の言論抑圧行動に対比するだけの重みを持った信者大衆に対する犯罪的行為といえよう。保守・革新を問わず、政治の側からの利用・支配的状况を脱脚せねばなるまい。批判書が出るたびに、一定の政治的意図を秘めて出現するチミモウリョウから絶縁し、あるいは絶滅する作業を行なうためには、宗教者はいかなる政治権力からも自立すべきである。

既成・新興を問わず、選挙のさいに教団が推薦する候補者は圧倒的に保守系政治家が多い。七〇年代には自民・公明連合政権が実現すると観測されている現在、かりにそのような政権が現出したさい、教団上層部は信者大衆にどのような形で責任をとろうというのだろうか。

2

創価学会に公明党の言論抑圧に対し、世論は大きく盛りあがりつつある。朝日ジャーナルの〈取材ノート氏〉は、「人々は大いに尻馬に乗るべきである」(44・1・25)とアピールしている。藤原・宮本全共闘の尻馬は、それほど乗心地がよいとは思われぬが、白々しきやうとまじさを押

し殺してでも、このさい尻馬に乗らねばならぬだろう。

なぜ白々しさやうとましさを覚えるかといえば、藤原氏の著作は、自民党の福田派と田中派との派閥間抗争に乗って出現した本であるという印象が強いからである。また、共産党についていえば、言論の自由を守るために赤旗でキャンペーンをはったというよりも、おりからの衆院選に有利な状況を現出させるために、選挙戦術として言論の自由を守るキャンペーンを行なったと受けとれる側面が強いからである。

日本共産党が終始一貫して言論の自由のために戦ってきたなどという神話は党員以外、だれも信ずる者はいまい。具体例はいくらでもあげることができるが、日蓮宗についていうならば、日蓮宗現代宗教研究所の丸山照雄氏がある総合誌に『宗教にとって政治とは何か』（44・11）を執筆したさい、編集部あてに「日本でも有数の総合雑誌とあろうものが反党分子の原稿を載せるのはよろしくない」といった電話が入っている。編集部員の一人が憤りをこめて私に語ってくれた。もちろん、この例は、公明党が行なった露骨な出版干渉に比べれば罪は浅い。しかし「日本でも有数の政治結社とあろうものが、そのような電話戦術を行なうことは、よろしくない」といえよう。言論の自由を守る

というのならば、創価学会がしばしば行なってきたような枯息な手段はさげ、その雑誌に申し出て、反論を書くべきである。

しかし、私は藤原弘達氏と日本共産党との珍妙なアベック共闘で提起された言論・出版の自由を守るという主張には、尻馬に乗らねばならぬと思っている。「利用できるものなら悪魔でも利用する」という政治主義が今回の共闘の場でも、熱っぽい月光仮面的な言葉の断片の底にカッチリと貫徹されている。その政治主義が鼻もちならぬからといって、このさい沈黙を守ることが、言論・出版の自由への加害者になるという立場に私たちは立たされているのだ。となれば、朝日ジャーナルの八取材ノートV氏の提唱にしたがって、結局は尻馬に乗らざるを得ない。しかし、決して乗心地のいい尻馬ではない。私には苦い記憶がいくつもある。尻馬自体の自己批判を促し、乗心地をよくするため、私の体験を報告しておこう。

昭和四二年末から昭和四四年四月にかけて私は仏教雑誌『あそか』別冊号の編集を引き受け、若い編集者の松下隆洪君と一緒に、この間三号にわたって別冊を送りだした。この雑誌の発行元は日本仏教文化協会といい、京都三千院の門跡・水谷教章師ら既成仏教教団の有力僧職者らがスポ

ンサーとなっており、別冊号のねらいは、沈滞しきった既成仏教教団に革新の機運を高めることにあった。

別冊の第一号は「新興宗教の実情と問題点」という特集テーマだった。編集を進行するさい、執筆者間に配った企画書が自民党参議院議員楠正俊氏の手に渡り、彼からプレッシャーをかけられる事件が発生した。名儀上『あそか』別冊号の編集兼発行人になっている市川義成氏がたまたま彼の友人であったところから、実質的な編集責任者である私を通さず、上司である市川氏を通して工作が行なわれた。そのいきさつについては私が『あそか』別冊号の編集後記に書いておいたので引用してみよう。

「……新宗連の事務局長をしていた現参議院議員のK氏が『PL教団』についての批判解説記事を雑誌が出る前に見たいから届けるようにと無法にも申し入れてきた。その記事の執筆者は小笠原信夫氏（注・小説PL教団）三書房刊・執筆者）だが、そのような条件では執筆に応じかねるといわれ、その原稿は掲載不能となってしまった。結果としてK氏の行為は編集権の侵害ならびに言論の自由の圧迫を図ることになった」

内藤国夫氏が『公明党の素顔』を執筆したさい、公明党側から受けた妨害と同じような経験を『あそか』別冊号編

集部も体験したのである。言論・出版の自由に対する侵害行為は、創価学会⇨公明党だけの専売特許ではないことを明記しておこう。自己のセクトに不利な発言は消していこうという傾向は、大なり小なり、それぞれのセクトが持ち合わせているといえよう。

ところで『週刊文春』が四四年十二月八日号で「ことし出た創価学会を書いた本」という小特集を行なったさい、PL教団の御木徳近教主は創価学会⇨公明党の言論抑圧について次のような抗議を行なっている。

「批判の書を書いた方はエライです。聞くところによると、学会は書籍の取次店にも圧力をかけたり、広告主や銀行関係に手をうったりしているようですが、言論抑圧はオカシイです。言論は自由、悪口をいうホメ口をいう両方の出版があつていい。……願わくば、よその布教を妨害したり、出版させまいとしたりするのはヤメてほしいですね」

新宗連傘下教団から推薦を受け、PLの票を得て当選した楠氏の『あそか』編集権侵害行為とは、きれいに断絶した地点から、PL教団の御木徳近教主は発言しているのである。

田中幹事長は公明党議員の「つぶやき」が耳に入ったため、頼まれもしないのに藤原弘達氏の『創価学会を斬る』

の刊行中止に動いたと伝えられるが、御木徳近教主の発言から推理すると、「つぶやき」すら聞こえないうちに楠氏は独自に行動を起したものと思われる。

3

しかし、ここで問題にしたいのは、実は楠氏の行動や御木徳近氏の発言ではない。楠氏が編集権の侵害にまで及ぶ行為をしたことは、彼の立場上、十分に動機があり、その程度の人だということに理解されないこともないからだ。私は保守系政治家の約束する言論の自由について過大な期待をかけてはいない。また、彼らが言論の自由を十全に保障するという幻想も抱いていない。

この楠氏の言論抑圧行為について別冊『あそか』に執筆していた日共系の執筆者に相談したさい、殆ど無視されたという事実がある。

人民のために戦う党であると自認・自称する日本共産党が保守系政治評論家の藤原弘達氏と共闘して、言論の自由を守るためにキャンペーンを花々しく展開している今日の時点で改めて問題にしたいと思う。

——と、ここまで書けば、日共系の諸君から「尻馬に乗るといいながら、旧悪を暴露するのは利敵行為であり、反

党分子である」といわれ、トロダとかアナダとか、寿司屋の職人の寝言じみた名前のもとに批判を受けるかもしれない。しかし、真に言論の自由を願うならば、そうした安易なレッテルづけで事はすむものではあるまい。

いかなるセクトからの圧力にせよ、ふだんに言論の自由を守るといふ姿勢がなくては、人民大衆への説得力信頼感が生ずるものではない。別冊『あそか』は他の宗教雑誌の大半が『PHP』調の思想善導用に編集の基本方針を置いているのに対して、停滞した宗教界の主流となれあわず、その変革を図ることに編集のウエイトを置いていた。そうした使命感があるからこそ、私や若い編集者は低賃金下にあつて、おりあらば編集方針にチェックし続ける経営者層の説得に当たってきたのだ。

したがって執筆者の大半は、広い意味での左翼系宗教学者や文化人が多く、日共系の執筆者にとつては宗教雑誌中数少ない貴重な執筆の場であつたはずだ。しかし、楠氏の無法な申し入れが行なわれたさい、別冊『あそか』編集部を親身になつて支援してくれたのは非日共系・反日共系左派の立場にたつ執筆者や友人たちであつた。

劣悪なる労働条件の中で経営者層に対する説得工作や外部の圧力をはね返すべく悪戦苦闘していた『あそか』編集

部は、日共系執筆者グループから、ただ一人の消極的協力という例外を除けば、傍観視されていたにすぎない。それが保守系政治評論家の藤原弘達氏の場合には、「正義の味方、真実の友」（週刊文春44・2・2日号）と同志扱いにして、たとえそれが一時的な蜜月旅行であるということが了解されるとしても、ふとジェラシーを覚えさせるほど、息のあったみごとな共闘を展開しているのである。

「藤原弘達のような反動的な男でも、言論の自由を守るために起ちあがったのだから、赤旗も協力したのだ」

と、後になって日共系執筆者グループの一人が私に苦しい弁解をしたが、それならば私たちが赤旗から応援してもらうためには、藤原弘達氏のように、いやそれ以上に反動化しなければならぬことになる。

政治主義的行動に対し、倫理的批判を行なっても、それがいかに無力であるかは、いやというほど知らされ、また知っているつもりである。ある政治的状況を現出させるうえで倫理的批判は時には重荷になることを知らぬほど、政治的白痴ではない。しかし、連帯し、信頼しあう基盤を破壊したのは、いったいだれか。不信任感を発生させたのは、私たち編集部員の責任なのか、それとも日共系の諸君の行動なのか。このさい、はっきりさせておきたい。そのため

に、あえて政治主義の限界をこのさい問いたい。

別冊『あそか』の企画・執筆にかかわりあった日共系の諸君に、本気になって、まじめに反省してもらいたいと思う。利用・被利用の観点からではなく、お互いが連帯しあえる基盤を構築する作業を空疎な機関紙的言語世界から脱脚した地点で行なってもらいたい。

また、別冊『あそか』編集部のケースは特殊的例外であるなどという弁解は、自己のセクト間でしか通用せぬ非連带的方言にすぎぬことも、このさい付け加えて置きたい。なぜならば徹底した自己批判を通過せぬかぎり、たとえ日共の諸君がせっかく用意してくれた尻馬に乗って八人馬一体Vとなって走ることができないからだ。よりよく走ってもらいたいからこそ、弘達流のペランメエ口調だけでなく尻馬のあたりから聞こえてくる私たちの「つぶやき」にも耳をとめてもらいと痛切に願うものである。

4

言論の自由といっても、資本制社会のもとでは、おのずと一定の枠があり、無制限な言論の自由は存在し得ない。そうした例は数多くあげることができよう。たとえば潮出版社で刊行している『週刊言論』では、アリナミンを批判

的に扱った記事を作成したさい、ゲラ刷りの段階で掲載を見合わすという不幸な事態が発生している。かの創価学会でも資本の側の規制からは、全く自由であり得なかつた一例だが、それにしてもゲラ段階まで作成した『週刊言論』の積極的な取組みぶりは激賞に価するといえよう。

こうした記事の大半は、企画段階で自主規制してしまうか、そうした企画すら立てようとしないうる哀れな自己規制をする者が多いからだ。これは出版社だけの問題ではなく個々の文化人・執筆者についてもいえることである。創価学会⇨公明党の出版妨害への批判がこれほど大きな高まりをみせているにもかかわらず、依然として沈黙を守り続けている文化人・知識人がいる。ことに総合雑誌『潮』の常連執筆者に多いのは、いったいどうしたことなのだろうか。出版・言論の自由について関心を持たないから、というように執筆先への配慮から沈黙を守っているものと思えない。また、かりに藤原氏や日共への嫌悪感や言論の自由についての取りあげ方に不快感を覚えるから沈黙しているのだとしたら、理由としては薄弱すぎる。それに言論にたずさわる者として自殺行為である。

創価学会⇨公明党の言論抑圧について作家の野坂昭如氏と語りあったさい、「ぼくは『潮』に連載で原稿を書いて

いる。しかし、だからといって批判を遠慮する必要は何もない」といつていた。創価学会⇨公明党の言論抑圧に対しミザル、キカザル、イワザルの態度をとることは、戦前戦時の言論統制を許容する心の下地作りにつながるというのだ。

「赤旗では、墮落作家などといわれたことがあるが、それにこだわって沈黙している時期ではない。いろいろとすつきりしない要素が、かぞえたてればいくらでもでてくるが、ともかく、物書きにとつて、藤原氏の作品は重要な問題提起を行なったものとして受けとめたい。」

と、自主規制をする意志などと毛頭ないと語っていた。（「中央公論」三月号に野坂昭如氏はこの趣旨のエッセイを寄稿している。）創価学会系出版物、ことに『潮』に執筆した経歴を持つ文化人の中では、野坂昭如氏は異色の存在といえよう。野坂氏が異色というよりも、野坂氏の反応こそノーマルであり、沈黙を守り続けている『潮』系執筆者グループのほうがアブノーマルなのだ。右翼の有力指導者の一人である児玉誉士夫氏が、巻頭の題字を書いて創刊された総合誌『流動』（44・12月号）に日共系の宗教学者である某氏が執筆した事実以上に、かれらが沈黙を守り続けているほうが、私には不可解である。それほど広く深く

『潮』を通じての文化人支配が進行しているのだろうか。
『流動』では四十五年の新年号で「公明党と共産党」という特集を行なっている。矢田竜馬氏の「公明党・若手プランナー九十九人の顔ぶれ」という報告を兼ねた論文からブレインを紹介してみよう。

公明党の内政、外交両面の政策ブレインとしては、嶺山道雄（国際文化研究所調査室長）、本間長生（東大助教授）、武者小路公秀（上智大教授）、中西治（法大講師）岡部達味（都立大教授）、伊東善市（東京女子大教授）、島野卓弥（同助教授）、清水幾太郎（前学習院大教授）、川上源太郎（学習院大講師）らの諸氏の名があげられている。さらに準ブレイン的存在としては藤島宇内（評論家）曾村保信（東京外語大学助教授）、大熊信行（神奈川大教授）、磯村英一（前都立大教授）、柚正夫（千葉大教授）氏ら七十～八十人の学者、評論家が随時、意見を求められている、とのことである。

矢田竜馬氏の記事には、学会員である大学教授、助教授講師、助手らの名前もあげているが、日蓮宗身延派の宗立大学である立正大学に中野三郎教授、立正女子短大に小林幹男講師の名がみられる。信教・思想の自由が憲法によって規定されている現在、立正大学に熱烈な創価学会員の教

授がいることは、それ自体、なんら問題にすべきことではなく、幅の広さを示すという意味で、立正大学の「美点」ともいえよう。もっとも、これは非宗門人の私の考えであるが、日蓮宗信徒はどのようにこの事実を受けとめているのだろうか。

5

創価学会Ⅱ公明党が日本の文化人に及ぼしたマイナスの影響力は、きわめて大きい。たとえば、『週刊文春』（44・1・19）が行なった「各界五〇氏Ⅱ創価学会への直言」という特集の次の一節は注目に価する。

……ここにⅡ直言を求めて、偏見なくピック・アップした各界名士のうち、なんと約四割の人たちが発言を断わってきた。

断わってきた人たちの中には、病気であったり、多忙であった人もいたことだろうが、それにしても、この四割という拒否率は、高すぎるのではないだろうか。また、断わってきた人たちの名前はあげられていないので、その人たちの思想・業績と創価学会Ⅱ公明党との在り方とを対比して、論評することができない。

そこで創価学会と公明党との親和関係を明らかにしている知識人・文化人の名をあげ、その人たちの業績とからみあわせて、問題点を探ってみよう。

作家の菊村到氏は、四年前の『文芸』に「数珠と幻想」という小説を発表し、創価学会への嫌悪感を描いたことがある。この作品は、菊村到氏の業績の中でも、群を抜いてすぐれた出来ばえを示すもので、『文芸』の読者に大きな感銘を与えた。ところが四十四年になって、『小説宝石』に「小説・池田大作」という作品を菊村氏は発表し、池田大作会長を魅力ある人間像としてとらえている。作品としては、「数珠と幻想」のほうが、比較にならぬほど佳作であることはいうまでもない。どうしてこのような変化を上げたのだろうか。菊村到氏の人生観・創作方法に革命的な変化が生じたのであろうか。それとも、この四年の間に、創価学会自体が大幅に変ったのだろうか。「だろうか」で終る文章を三回も続けて書いてしまったが、誰かこの疑問を解いてくれる人はいないものだろうか。

また、藤島宇内氏は北鮮問題研究家として知られ、左派的立場にたつ筋の通った評論家としての印象が強かった。しかし、藤島宇内氏は昨年八月、『月刊ペン』で行なった「公明党特集」で、修正資本主義路線にたつ公明党を没批

判的に扱った作品を発表し、私を初め、これまで藤島宇内氏の作品を愛読してきた読者の期待を大きく裏切った。

また、公明党と鋭く対決するという方針を打ちだしている民社党では、その理論的イデオログであり、長老的存在でもある蠟山政道氏が、「公明党に期待する」といった賛辞を公明新聞に寄せている。

このような理解に苦しむ文化人の行動を数えただていけば、まだまだ例をあげることができるが、結論として朝日ジャーナルの「取材ノート」で主張しているように創価学会系出版物に寄稿していた文化人も、いまこそ、言論・出版の自由を論ずるべきであらう。ことに『潮』に執筆経験をもつ新左翼系と目される文化人のほとんどが口を閉ざしているのは、いったいどういうことなのだろうか。

——と私が一人で方んでみたところで、一向に重い口をあげようとしないのでから、『潮』の常連執筆者の一人である梅原猛氏と潮出版社との「奇妙な共闘関係」の一側面に照明を当てて、その自主規制ぶりを論じてみたい。

四十四年の十二月初旬、東京・渋谷の神泉町にある日本仏教文化協会の、市川義成氏あてに内容証明郵便物が届いた。差出人は山崎正友法律事務所となっていた。潮出版社から、仏教雑誌『あそか』に掲載された記事についての謝

罪要求がその郵便物の内容であった。潮出版社がどのような形式をふまえて抗議してくるか、参考になるので、以下全文を掲載してみよう。

通 告 書

東京都新宿区南元町一四番地一号

株式会社「潮」出版社内「潮」編集兼発行人

通告人 池田克哉

東京都新宿区若葉町一丁目一〇番地大洋ビル

右代理人弁護士 山崎正友

東京都渋谷区神泉町二七番地

日本仏教文化協会内「あそか」編集兼発行人

被通告人 市川義成

記

一、被通告人が編集権発行人となつている雑誌「あそか」昭和四四年一〇月一日発行第九五号の一九頁より二四頁にかけて、「アンコール・ワットと仏教、その七」なる記事が掲載されているが、その中の三四頁上段二一行目から中段三行目にかけて、「私、びっくりしました」が、『潮』という雑誌を編集しているのは三人です。普通の雑誌は五人でやっている。たった三人でやって別冊

を四カ月に一回出している。わずか三人の人間が毎月一冊、あんな厚い本を出すのは大変である。しかも別冊を出している。彼等は普通の編集者の何倍も働いている。しゃべってみると、はっきりした知識はない。教養はないんです。」との記述がある。

二、月刊誌「潮」は四〇万部以上の発行部数を有し、わがくに有数の総合雑誌として名声を博している。株式会社潮出版社はその発行元であり、広く出版活動を行なつてわがくにの文化向上に多大な貢献をしているものである。

三、現在、「潮」の編集人は十一名であり、しかも大学卒業後、出版物編集の経験を有するものである。又、月刊誌「潮」及び別冊の編集にあたつても全員が一致協力してすぐれた内容と企画をつくり、読者の信頼に応えている。

四、しかるに前記記述によれば、月刊誌「潮」は、わずか三人で編集されており、しかも教養のない編集人によつて編集されているということである。この記述は、読む者をして月刊誌「潮」がわずか三名の教養なき編集人の手で編集されているとの認識をいだかしめ、潮出版社の信用と名誉をいぢりしく傷つけるものである。又、

高度の知的作業である総合雑誌の編集にたずさわる者に
とって、根拠のない無教養呼ばわりは、とうてい無視す
ることのできない名誉毀損である。即ち前記記述は刑法
第二三〇条の「公然事実を摘示して他人の名誉を毀損す
る」ものであり、被告人は通告人に対し、名誉毀損に
よる民事・刑事上のあらゆる責任を負うべきである。

五、よって通告人は被告人に対し、昭和四五年二月号
「あそか」誌上に被告人の負担において後記文面の通
り謝罪広告を掲載し、通告人の名誉を回復するとともに
今度二度とかかる不法行為を行なうことのないよう要求
する。被告人において、右の要求に対し、ただちに誠
意ある履行なき場合は、止むを得ず刑事・民事上の訴追
の手續を取る所存である。

右通告する。

昭和四四年一月二日

東京都新宿区南元町一四番地一号

池田克哉

東京都新宿区若葉一丁目一〇番地大洋ビル

右代理人弁護士 山崎正友◎

東京都渋谷区神泉町二七番地

日本仏教文化協会内

「あそか」編集兼発行人
市川義成殿

謝罪広告文案

昭和四四年一月一日発行第九五号「あそか」誌上の
「アンコール・ワットと仏教、その七」という記事の中
で、二四頁上段二〇行目から中段三行目にかけて、株式
会社潮出版社及びその編集人各位に対し、事実無根の中
傷を記載し、その名誉と信用をいぢるしく毀損したこ
とを関係者並びに読者に対し、深くおわびいたします。
今後は、かかる行為で御迷惑をおかけすることのない
よう充分注意します。

昭和四四年 月 日

株式会社あそか出版社

代表取締役 野間秀泉

「あそか」編集兼発行人

市川義成

株式会社潮出版社殿

「潮」編集人殿

6

この潮出版社側からの抗議ならびに謝罪要求は、当然の

ことであり、全く正しい。読者に対する責任からいっても編集者が「知識はなく、教養がない」などと根拠もなしに酔っ払いの放言にも似た言葉を活字化されて、黙認することはない。そうした発言を行なった者の無知・無教養ぶりこそ問われねばならない。

しかし、通告書中、「アンコール・ワットと仏教」という名譽毀損的文章を含む愚劣きわまりない記事を書いた筆者の責任と謝罪を追及する言葉が一つとして見あたらないのは、いったい、どうしてなのだろうか。

法律上の細かい約束ごとは知らないが、こうしたいさには、執筆者と編集兼発行人とが謝罪するのが至当であると私は心得ている。「アンコール・ワットと仏教」の執筆者は、梅原猛氏である。正確には日本仏教文化協会が昭和四三年十一月二四日から一二月九日にかけて、既成仏教教団関係者約二〇名の参加を得て主催した東南アジアの仏教参拝の旅行会に同行した梅原猛氏が行なった講演記録である。

なお、この講演記録が『あそか』に連載されることは梅原猛氏も承諾しているのである。公開の席で彼が講演したさい、テープにとっておき、活字化したものである。したがってかりに編集者が意図的に梅原猛氏の講演内容を改ざ

んしたとしても、テープ保存、さらに出席者の証言などで現在の時点でも容易に事実関係を明らかにすることができるようになっている。

もし、潮出版社側が当然なされねばならない梅原猛氏の責任を追及するさいには、いつでも便宜を図れるよう『あそか』編集部ではテープを保存してあるという。梅原猛氏は『あそか』にも、たびたび執筆しているが、だからといって、特定執筆者を過保護せず、言論の自由と公正な運用を期すため、潮出版社側にテープを聞かす意志があると『あそか』編集部では明言している。

なお、潮出版社側からの通告は、さらに検討を要する問題点を含みつつも、大筋において、その主張の正しさを認めざるを得ず、『あそか』二月号に原案通りの謝罪文を掲載したとのことである。

なお、この通告書が日本仏教文化協会に送られたおり、梅原猛氏から「無知で教養がない」と批判？された『潮』編集部員の編集した『潮』新年号では「智慧と知識の差」というテーマの座談会記事に出席者として梅原猛氏を登用しているのである。苦笑を覚える前に釈尊もしのぐかと思われるその寛容な態度に、私たちがせびまなばねばならぬと思わず心打たれたのである。

実をいふと謝罪文を掲載するか否かを定める会合に前任編集者を代表して私も呼ばれた。当然、梅原猛氏の問題が出された。編集兼発行人の市川義成氏から伝えられた梅原猛氏の言葉は、「創価学会を相手にしても、小出版社が勝てる見込みがないから、適当にしておいたほうがいい」という忠告だった。もし、その言葉が事実ならば自から紛争の種をまいておきながら、無責任すぎるという印象とともに、やはり『潮』の常連執筆者としての自主規制が働いているのかと寂しい思いがした。

というのは、梅原猛氏がかつて『思想の科学』誌に発表した創価学会批判はすぐれた力作であるという記憶と、中公新書として刊行された同氏の『地獄の思想』はいまだに私の愛読者となっているからである。伝統仏教の教学から多くの養分を吸収して、作品を発表し続ける梅原猛氏の業績には、一定程度の評価を惜しまないものである。また、梅原猛氏は、既成教団関係者で構成されている伝道文化協会から、伝道文化賞を贈られている。

梅原猛氏は立命館大学を去るにさいし、「大学には自由がない。私は大学を出て全共闘の諸君と連帯したい」と学生たちに別れの言葉をいったというが、同大学関係者から朝日ジャーナルの最近号で「彼の処世性にすぎない」とい

った批判を浴びせられていた。たとえば伝統教団側の宮坂宥勝・高野山大学教授と共著で本を出版しているが、創価学会系出版物にも寄稿するという自由を得るために、梅原猛氏は大学を去ったのではあるまい。また西洋哲学者から処世哲学者に転向したのもあるまい。彼が真に全共闘の諸君との連帯を欲するならば、明確に自己批判すべきである。根源的に自己告発を行なうという姿勢がなくてどうして全共闘諸君と共闘できるのだろうか。

それには、まず、「無知で教養がない」といった粗雑きわまる批判ともつかぬ批判を創価学会系出版労働者に浴びせた非礼を社会的に公的な場で謝罪すべきである。潮出版社側の通告書にたまたま自分の名前が記載されていなかったからといって、沈黙を守り続けるべきでない。また潮出版社側も、誤解を招くような通告書は撤回して、改めて梅原猛氏の責任を追及した通告書を『あそか』編集部に送り直すべきである。この手続きをふまぬかぎり、梅原猛氏の「無知で教養がない」といった指摘は的を射ることになる。

ともあれ、梅原猛氏のこのケースは、既成教団人が自らの内なる退廃面にはメスを入れず、創価学会＝公明党の言論抑圧についての批判をくり返しても、伝統教団の創造的

発展はあり得ぬという貴重な教訓を与えてくれたといえよう。

拙稿の一部は『出版ニュース』四五年二月上旬号「創価学会」公明党の言論抑圧をめぐって」に発表した。